

---

良い夢を。

封弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

良い夢を。

### 【ZPDF】

Z0602D

### 【作者名】

封弥

### 【あらすじ】

快斗と青子は、ずっと「寒い」と言っている。青子は家にマフラーを忘れたという事に気がつくのも遅かつたため、手袋はあるもののマフラーは無し。其れをみていた快斗は、自分のマフラーを手渡す。一旦快斗の家に行こうという話になり、快斗の家に向かう。しかし、快斗の家で快斗が

(前書き)

これは名探偵コナンのFFです。  
何て言ひんでしょうか…？カッフルをくつつけて其れについて色々  
書いていくみたいな感じですか？（知りませんから

文章などのパクリは禁止です。

それから、脱字・誤字など気をつけていますが、もしも見つかりま  
したら連絡お願いします。

「寒いよ……！」

「何言つてんだ、俺も寒いんだからなー！」

「知つてるよそんな事！」

「じゃあ、俺の家にでも行くか」

「…その方が青子も助かる」

「意味解んねー」

「良いじゃん、行こー！快斗」

「わーったよ」

そんな会話をしているのは勿論俺、快斗と幼馴染みの青子。  
一人で外には出てみたものの、雪は降つてゐるし、気温は低いしと最悪な状態だ。

そこで俺の提案は昨期言つたとおり、俺の家に行くこと。

青子は其れが嬉しいみたいだけどな。

「そうだ、青子。これ、使えよ」

そう言つて俺が放り投げたのは、俺がつい数秒前まで使つていたマフラー。

青子は手袋はしているけれど、マフラーがないのだ。

「…え？青子、大丈夫だよ？」

「震えてるの丸わかり」

「でもつ！快斗に無茶させたくないから！」

「無茶してるのは青子だろ。使つとけ、俺は大分暖かくなつたしな」

「御免ね、快斗。使わせてもらつね」

「謝んな。青子、ずっと『寒い』って言つてたろ？」

そり、青子は家を出て一十分ぐらいしてから、マフラーがないことに気がついたみたいだが、あまりにも距離が離れすぎで、取りに行くのも大変だ。

青子は『そのままでも大丈夫』なんて言つて、ずっと我慢していた。其れをみていて、俺は何かしてやらないといけないって思つて、マフラーを渡すことに。

「青子がもつと早く気がついてたら良かつたのに…」

「気がつくのが遅かつたのは仕方ないだろ。今度は気をつけろよ。」

「りょーかいしました！」

「つて言つてる間に家に着いたな」

「時が進むのつて早いよね！じゃ、御邪魔しますー！」

「…誰も居ねえから大丈夫だ」

と、一步階段に足をかけた瞬間、凄い急さに襲われて一瞬よろける。ヤベ。昨期のマフラー無しがここに来たか。

「じゃ、青子何か持つてくるね」

「おう。毎度毎度御免な」

「やだなー堅苦しいよ」

もしかしたら、青子は気がついていたのかもしれないけれど敢えてそのか其れには触れなかつた。

ソファーに横たわり、階段下から匂うココロアを少しだけ堪能。気がついてみれば、頭痛に襲われる。

今度は頭痛かよ。  
其れがまた結構痛い。

いつの間にか睡魔に襲われ、俺は目蓋をむりしていた。

「……と……と……快斗」

「……青子?」

「よく眠ったよね快斗。やっぱり無茶してたんじゃないの、マフラーの事」

「いや……その……青子が優先だつて」

「自分の体を先に考えなさいってば……青子も、快斗が愈そうなのは気がついていたけれど、まさか38も出ていたなんて、驚いたよ

「ハハ……迷惑かけすぎだな、俺」

「ううん……全然。今日一日中看病してあげるから、ゆっくり休んでよ」

「御免な……本当に……そうだ」

「どうしたの? 快斗……さやああつー何すんのー」

俺は青子の腕を引き、布団の中で更にその俺の腕で閉じこめる。

「ううしたら一日中青子が看病してると同じだい」

「全然違うつて! これってただ、『一緒に寝ろ』って事でしょ!」

「俺、一人嫌いなんだよな」

「嘘ばっかり! ……仕方ないなあ」

そう言つて、青子は俺の手を軽く握る。  
体は寒いはずなのに、握られた手だけが妙に暖かかった。

「快斗の手、熱いね。やっぱり、熱引いてないよね」  
「つたぐ、風邪にかかる俺もどつかと思つてどな」  
「快斗の手、暖かいけど、青子の手冷たくないよね?」

「冷たいけど、今はそれがちゅうひ良い」

「そうかな」

「当たりめーだろ。熱が出てる人間は、冷たいものが一番なんだ！」

「其れが青子って言いたいの？」

「いいや。お前は元から暖かい性格してるだろ？優しい」

その言葉の後、少しの静寂が出来た。

どうしたんだと青子をみてみれば、顔は真っ赤。

「そんな風に青子の事想つてくれたの？…快斗の馬鹿ッ！」

「え！？」

「凄く嬉しいよ！嬉しそぎるよ…快斗」

「つたく、毎度毎度泣くな。俺がもつと風邪酷くなるだろ」

「う…御免」

「何て冗談にきまつてんだ？」

「酷い！…」

「ありがとな、青子」

「良いの…快斗が良ければ其れで…」

そこで言葉は跡切れる。

いつの間にか左隣で俺に抱きついていた青子は、寝息を立てていた。

「この顔がたまらねえんだよな。可愛過ぎるんだよ、青子。

そつと指を青子の髪に滑らす。

眠っているのに、青子は微笑みを浮かべている。

看病、ありがとな、青子。そして…良い夢見ろよ。

End

(後書き)

一応、ほのぼの?なんでしょうかね。

小説書き始めてやつと一年がたつたばかりで…；

今回はやつぱり快斗と青子。

この一入つて凄く書きやすいです^\_^

と言つより一応快青がメインです；

新蘭とか平和とかコ蘭とか色々チャレンジしてみますが；

それでは…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0602d/>

---

良い夢を。

2011年1月18日22時01分発行